

巻 頭 言

別府大学日本語教育研究センター長

松 田 美 香

別府大学日本語教育研究センターが2009年4月に設立されてから、今年度で丸5年になりました。その間、体系的・効率的な日本語教育の環境の整備と全学の留学生への学習支援を目指し、能力別クラス編成と同時に各技能別クラスを独立させました。このように留学生が自分のレベルに合わせて科目ごとに上下することを可能にし、得意・不得意に応じた日本語の授業を展開してから2年が過ぎようとしています。

さらに、今年度は「年次を上げた日本語教育科目の充実」を目指し、留学生が希望すれば3年（短期大学部は2年）まで日本語教育をバックアップする体制をスタートさせました。新体制で臨んだ新入2年目以降の日本語教育ですが、大学では国際経営学部のバックアップもあり、3、4年生の留学生の受講者が増えたのはもちろんのこと、「ビジネス日本語」科目では日本人学生と共に学ぶクラスもいくつかできています。このことにより、私たちは留学生のみを対象にした授業内容では許されない、新たな挑戦を強いられることとなりました。

さて、研究のための『別府大学日本語教育研究』も、本号で第4号となります。昨年度から学内の研究助成を受けて研究GP「「語学教育におけるプレイスメントテストの効果的な活用と教育効果の測定に関する共同研究」が始まり、5月の成果発表会や今年2月に本学で開催した国立国語研究所教授窪菌晴夫先生の講演会「日本語の音声構造と音声教育」など、研究活動も活発になってきました。教養英語担当教員との連携がうまくいったことも、研究を進める大きな原動力となっています。この研究の詳細は、本号の論文としてお読みいただければと思います。また、在台湾の岡本先生からの御寄稿もあり、徐々にではありますが、研究の面でも特色が打ち出せるようになってきたことを感じさせる本号となったことを、関係の皆様への感謝とともに嬉しく思う次第です。

前号から1年を経た現在も、近隣諸国との関係が予断を許さない状況です。本学での日本語教育が、それらの国と日本との「懸け橋」につながっていくようにと願います。学習者の個性や可能性を尊重してその成長に寄与するものでありつづけること。本センターは、そのための努力を惜しまず、邁進していくことを誓います。

最後になりましたが、本号の刊行にあたって様々なかたちでご支援をいただいた方々に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

平成26年3月15日